

〔資料〕

石川県鳳至郡
門前町門前

鬼屋神社「農之次第」

室 木 弥 太 郎

卷子本一卷。表紙は改装、綾、紺色無地。縦二七・八cm、美濃紙。絵はなく、江戸時代初期の写しか。しかし後の書き込みがある。箱の蓋(表)に「農之次第 鬼屋」と墨書。本書はすでに「鳳至郡誌」に翻刻されているが、直接原本に依らなかったとみえ、誤りがかなりある。今回山上嘉久氏のご好意で原本を見ることができたので、そのまま翻刻することとし、簡単な注を施した。注は原栄一氏の助力を得た。山上氏とともに同氏に感謝する。

能州鳳至郡総持寺鎮守

神明宮様に於

毎年正月六日農^(マ)の次第

農之次第²

一つひたつて宝殿^(宝)のてい^(を)を^(を)おし^(を)拝^(を)て^(を)見て候へは、獅駒犬仏奥^(獅子)ノ^(は)な^(な)ざ^(な)られ^(な)い^(な)し^(な)やく^(な)ち^(な)よ^(な)に^(な)至^(な)ま^(な)て、^(な)る^(な)り^(な)を^(な)の^(な)へ^(な)た^(な)に^(な)こ^(な)と^(な)な^(な)ら^(な)す、^(な)まつ

しよさんのはじめに⁷な⁸に⁸そ、⁸一もの⁸作⁸に⁸二あきなひ三にはこ⁸が⁸ひ如意田畠なり、いわひとてまつ目出候⁸

是を宝殿に向ひてたちて、¹⁰はないねの米と扇子を手にもちそ

へていふなり

一こ、ろとしよしこ、ろ平等、^(びやうと)夜一夜あけて聞て候へば、よき鳥の

ねをもきいて候、一番にとしよしともさひすり候、二番に作り田

もよしとさひすり候、三番にこかひよしともさいすり候、まつ目

出候

但ねまりて^(ね)まほし^(ま)二つ三つた、き、是をいふなり

一となりのけんぎやう^(けん)太夫かいぬも、^(か)ほゑ^(ほ)ばわり候ほとに、^(と)ゆく

ちのて^(て)ひおも見たては^(ひ)やと^(や)そんし^(そ)候、^(そ)あつ^(あ)はり^(は)ゆくちのてひ候や、

したには^(し)ねしろの柳は^(ね)ゑし^(え)けり、^(け)爰^(え)ふめ^(ふ)ば^(め)ちみぶつとうき、^(ち)かし

こふめは^(こ)ちみぶつとうき、^(ち)ちみさう^(ち)とうに^(さ)うき^(さ)あがり、^(あ)ゆ川^(ゆ)をは

たてすとも水^(みづ)ばかり^(みづ)ならしにて候、まつ目出候

但たちて宝殿に向ひて是をいふなり

一七、^(しち)六ち^(む)よかたてと思ふてうみつむいて候へば、十六ちよかたて

も有つべしう候、若人^(わうとど)どもの草かり⁽²⁰⁾こんなし、わらへ^(ち)ともものへそ⁽²¹⁾たち⁽²²⁾こんなしまても有つべしう候、まつ目出候

但⁽²³⁾はるはたほぐせにもちをさしつむ⁽²⁴⁾ニして、ねまりておひく

ねそく⁽²⁵⁾といふて、たちてほうてんに向ひて三度かへし、さ

したるもちとおふきをもちそへ是をいふなり

ひとくわうちてかひて候へば、七年作のふる酒のかざか⁽²⁶⁾、ほかく

ほふとして候、又ひとくわうちてかひて候へば、まつ目出候

但⁽²⁷⁾たをうつほくせにさしたるもちをくわとして、ねまりて、

さらば野ばやにも御座候ほどに、たをうつへきと申、たちて

是をいふなり

はないねの米をまくなり

一とし吉、御意吉、ひけしろもちのたね、しりのせまち、ゑざし、

さかりよし、わせのたね

但⁽²⁸⁾ねまりて、なわしろ所こしらへは⁽²⁹⁾やとそんし候といふて、

くわこちしてといふて、ねまりてたいこをうち水をすます時、

うたに、すめくちよう⁽³⁰⁾おきの田へ水あちやうと三へんい

ふなり

一あつぱりあせのぬりやう候や、から竹二つに見たひたにことなら

す、かう打たるみとはかせのなん、かう打たるみとはひのなん、

かう打たるみとはふつきまんふく、我町へたからものを入るみな

とにて候、まつ目出候

但田こしらへ、一ばんにくろをきり、あせをぬる、ほめたち

て是をいふなり

一まへ山にとりては、こめやなき、い、やなき、しろかねのこくき、

千万町にそんふりく、おく山にとりては、こかねのにはとく、
せんまん町にそんふりく、さておふあしをふみ、こてをつこふ
なり

但田⁽³¹⁾のくき、たちてほうてんに向ひて是をいふ也

ふくどふをよび出し、おく六つのくにへ馬牛のしもふにくたそ

つるにて候、ふくとふと申ものは我朝にてなんねんほたひ大日本

国能州鳳氣至郡櫛比庄寺中尾高瓦にて、とし久しきふくとふにて

候ほとに、奥むつのくにへくたらつるにて候、ふくとふよく

牛ひいてまいれ、ふくとふよ、こぞは牛のとし、ことしはみやう

ほうれんけのとらのとし、歳もよ、はらこの入まで、おくむ

つの国へくたり候ところに、こん太郎ひやうへたちのおほせられ

やうは、ふくとふ遠路罷下り候間これへくとしやうじられ候は

とに、まくつかんてざしきののを見て候へば、天晴座敷のてひ

候や、うんけぬへりににしきへり、こうらいへりのた、みせんち

よばかり、つめしきにしかれ候、ふくとふなをろうつるさしきへ

はかまの、たちすわとおろし、なおり候へば、ちやうかたきく

かたくりありのみをさかなとして、とちの木の本うちごきをさか

つきさため、のめやくとおほせられ候ほとに、ゆんでにはうけ

てには、あらくさんよう仕候へば、六七十ばい給て候、ごん

たろひやうへたちの、おほせられようには、ふくとふあんろ罷下

りほとに、二十九八まきをばふくとふに引手物にとらすぞと被

仰候、御酒はよくたまわるなり、いたるさしきを札たちにして、

はかまの、たちたかくととり、うへの山へつるくとはしり

あかり、いちのまきの戸をきりくとあけ見て候へば、さも馬と

見へて候か、まなこは日りん月りんを見だいたにことならず、ま

へ足をは飯の山へかつはとふみのほせ、うしろ足をはさけのいつ
 みへふみおろし、おはあけのいとをみだいたにことならず、是は
 当社権現の神馬とこ、ろへ、二のまきの戸をきりくどあけ見て
 候へば、さもうしと見て候へば、しろゑのよねをにつとりくど
 かみおり候ほとに、そばなるい、さ、かひかなぐり、へんへひと
 よふで見て候へば、こんめひとこたへて候、又へんへひとよふで
 見て候へば、まんめひとこたへて候、あら米まめとて目出度もの
 はなきものとして、又そばなるい、さ、かひかなぐり、へんへひと
 ようて候へば、なつの日はてるに、月に三度つ、のうるおひ
 とこたへて候、又そばなるい、さ、かひかなぐり、これはふくと
 ふしんかひとこ、ろゑ、へんへひとよふて候へば、ごん太郎兵衛
 たちのひとりむすめのむこにならはやとこたへて候、ふくとふな
 のめによろこひ、きはなつるをむすと通し、牛のあしたちをも見
 はやとそんし候、あつはり牛のあしたち候や、まなこは日りん月
 りんのことくなり、かうさいたるつのはかせのなん、かうさいた
 るつのはひのなん、おはけきやうの八のまきを押しおろいたに
 ことならず、ながつほにしと、のつて、一束に四斗八升一束に四
 斗八升く

但さしきに出、たいこをうしにして、はなとりをよひ出し、
 とらするなり

一あつはりなゑのあしたち候や、こがねのりんばんおしひらいたに
 ことならず、千ちよかりのなゑと思ふて、まいて候へば、あしう
 らまんくちよのなゑも有つへしう候、若人ものほしりた、わ
 らへともくちりたまても有つへしう候、まつ目出候
 但おくむつのくにより、馬牛をもひき登り候ほとに、なゑの

あしたちをも見はやと存候と申、たちてほうてんに向ひて是
 を云也
 一たうへやそうとめ、かさこてきしやうに、かきたにきしやうなら、
 たをはしやふりしやとうよ
 但たうへるなり、子共をよひ出しうへるなり、たいこをうち
 て三へんはやすなり

一はしはなにはし、よしはし、しるは何、めしる、さいはなに、さ
 んせひらきまめ
 但ひるひまこごんたてをとうなり、又たちてみをいれるなり
 ひんたの山より、山ちをよせて、此木を直し、みとふとさためた。
 其又末をは。一つにひらい戸。二つにふせき。三つにみせ木。四
 つにより戸。五つにいわひ戸。六つにむなき。七つになけし。八
 つにやり戸。九つにこまい戸。十に戸ひら。其又すゑをは。つき
 うすともさためた。其又すゑをは。すりうすともさためた。其又
 末をは。すきからともさためた。其又末をは。まんくわからとも
 さためた。其又末をは。くわからともさためた。ひんたの山より
 上郎たちを。千人はかり。しやうしやよせて。いとわたとらせ。
 みちやうとさためた。其又末をは。たすきともさためた。すゑ
 のちうく。きじのおもひば。かものまがりば。いぬいのすみに。
 おさめやおいたり。と三へん返す也
 但たはやし、いつより世よしと、是も三へん是を座中よりは
 やすなり

正月六日之朝於 御神明様ニ農之次第
 書改之者也末世失念有間敷者也

注

1 以下三行別筆で、新しい。

2 「鳳至郡誌」(大正12年刊)は次のように説明している。

○鬼屋神社(櫛比村)字鬼屋に在り。村社にして天照大神・豊受大神を祭る。当社はもと神明社と称して、総持寺の守護神なりしが、維新後神仏混淆禁止の際分離す。

鬼屋神社は通称神明殿と称す。其祭礼は二月及び九月を以て行はれ、特に春季祭はゾンベラ祭の名を以て喧伝せらる。此日男子は麻社袴を著け、女子は普通の服装にて社参し、神職の神楽・献膳・祈念の式を終るや、参詣者は直に拝殿中央に進み、約二坪の板敷を囲み輪狀に座を占む。之を仮定の田となす。次で一人の若者出で、「今年は日和能く、野の道作りも早く済み、今より用水を上げ、苗代を拵へ、田植の順序として先づ馬耕に取懸ります」との挨拶を述べ、田地を荒起しするの状を為す。是に於て鉢巻を占めたる若者二人、撃柝の合図を待ち、馬に擬したる大太鼓に「鞭を加へ、鏡餅を薄く延べたるもの、中心に柄を通したる鍬を以て、周囲の人頭を畦畔に擬し、「エエ、ゾンベラ」の懸声と共に、幾度となく彼の鍬を振上げ、以て土を盛るの状を為し、次で「ネソネソネソ」と言ひつゝ、鍬を以て人頭を撫で廻る。次に「ホイホイ」の懸声勇しく、右に左に馬を馭して諸人の喝采を博し、次に畦塗の状を為す。青年男女は皆此鍬に觸るゝを喜び、以て良縁を得るの吉兆なりと信ず。最後に妙齡の女子松葉を以て稲苗に擬し、雪白の手拭と真紅の襷を用ひて田植の状を為し、こゝに一切の式を終ふ。但旧時行はれたるものは其式極めて複雑なりしもの、如く、其唱ふる辞句と行事とは「農之次第」と題したる一編に載せて現に之を伝ふ。

3 以下読みやすくするため、() をもって、漢字あるいは仮名を最少限当てる。

4 「仏」を「神」に改めている。「奥」に後筆で「ヲく」と読み仮名。

「仏奥」は神仏混淆時代に、仏像(本尊)のあった、その奥の意であらう。

5 「はなざらしいしやくぢよ」を棒線で消し、右傍に「大元水器御宮中鈴」と記している。「大元」は「大元帥」(タイゲンと読む)。こゝは大元帥明王を本尊として、国家鎮護のため宮中で行なう修法があり、それに用いる、水を入れる器と鈴と鈴であらう。しかし元のまがよい。

6 瑠璃を広げたように美しい。

7 「しよさん」は「初参」で、こゝは祭事に新たに参加して、先ず寿ぐことは何か、の意か。

8 「」の右下に朱で「ツ」と記すが、これは後筆で、「イチ」と読んだかもしれない。

9 思いのままになる田畠。

10 静岡県の駿河地方で、神社に参拝するとき用いる洗米を「ハナイネ」という。「ハナイレ」(新潟県西頸城郡三宅島)・「ハナヨネ」(仙台市・八丈島)・「オハネア」(宮城県石巻地方)・「オハナエリ」(山梨県巨摩郡)等、大体同意に用いられている(以上「分類祭祀習俗語彙」)。

11 神主の長であらう。「検校」は総務を監督する役。

12 湯の出口。こゝの「湯」は温い春の水。

13 「あっぱれ」の転。すばらしい意。

14 流水に洗われて、根の白い柳。柳は神意を卜する木として尊重される。

15 「ちみ」はみみずの方言か。「地味」(米の意)に掛けていよう。

16 「湯川」は湯や水を浴びること。「湯川を立つ」は春の温い水を浴びて神意を問うことであらう。

17 「水場」は、土地が低く水のつきやすい田園。そこが升掻きでならしたように、春の水がみなぎっているのであらう。

18 四十九日間長さ六丈にと思つて、の意か。

19 出来上ることになった。

20 滋賀県の朽木谷その他では、労働服の名で、材料は麻の布だが、

以前は専ら藤布であったという(「服藝習俗語彙」)。

21 麻製の。

22 中部地方の山村には今も広く利用せられているが、名は一つで形状はすでに区々である。主として草取に使う一端を尖らせた七、八寸の竹片をいう処もあるが、土地によっては鉄製もある(「分類農村語彙」)。前後の関係からいってこれであろう。

23 糸巻きの心棒のような形にして。

24 本殿。

25 以下土の臭いのすばらしいことをいう。土をはめると、土はいよいよよくなる。

26 におい。

27 糯米をむした飯。

28 野(田の畔をいうことがある)の早口(不要の水を早く流す口)を、水がどどんと流れる様をいうか。

29 おほしめしに叶う。「とし吉」「さかりよし」とともに、誉めことば。

30 白い細い根が沢山生えた。

31 餅にできる米・粟・黍。

32 うしろの、田圃の一面、川から田へ水を引く溝。

33 畝での掘り起こし。

34 未詳。

35 ひろびろと広がる田。

36 真竹を二つに割ったのを見付けたように、まつすぐで美しい。

37 田の水口であろう。

38 風の災難を避ける意か。

39 水門。港。

40 「あぜ」と区別し、山の斜面、田畠の隅をいうか。

41 蜆花(しじみばな)か。

42 未詳。「米柳」の連想か。

43 姫萩か。

44 「しろかねの小草」に對す。「にはとく」は「接骨木(にはとこ)」の転であろう。

45 「泥田に入つて行く者が履いて居る板製の大型の足駄。是に紐を附けて両手に持ち、巧みに操つて土を均し、又刈敷や草肥を田に踏入れる。九州には之を只アシタと謂ふ所もあるから、大足駄の略であることがわかる」(「分類農村語彙」)。

46 右は「田の草」のこの意か。

47 「下さうするにて候」の転。

48 「南閩浮提(なんえんぶだい)」の転。須弥山(しゆみせん)の南方海上にある大陸。ここは人間の住む世界の意。

49 「寺中尾」は総持寺近辺の地名、「高瓦」は未詳。

50 「下らするにて候」の転。

51 誉め言葉に用いたか。

52 「や」の次に、朱で○を付し、右傍に朱で「日もよや」と記す。

53 鰯(魚の卵)がいっぱいになるまで残しておく鰯(河鰯)の意で、

「奥陸奥」に掛けた、序の詞か。

54 縹緗は錦の一種、赤地に黄・緑・青・紫などの色糸で縦筋を描き、

その間に菱形や花形の文様を織り出したもので、それを縁とした畳。

55 高麗錦(白地に黒の花形の模様を織り出したもの)の縁の畳。

56 すきまもなく敷いてある。

57 袴の上部左右のあいている所を縫いとめた部分。

58 紙を蝶の形に作り、祝いの銚子や提子(ひさげ)に付けるもの。酒の毒を消すという。蝶花形。

59 菊花の形のもの。しかしここは「蝶花形」を「蝶形菊形」としたもので、本来は蝶花形の飾りを付けた銚子などで、栗などをさかなとして、の意であろう。

60 梨。

61 手作りの椀。

62 「き」の次に、朱で「と」と記す。

- 63 「は」の次に、朱で○を付し、右傍に朱で「うけ」と記す。
 64 「り」の次に、朱で「候」と記す。
 65 うやうやしく立ち。
 66 「け」の次に、朱で「て」と記す。
 67 いかにも。
 68 以下馬に対する誉めことば。
 69 「け」の次に、朱で「て」と記す。
 70 色のついていない絵。ここは白い意か。
 71 「いざさ(笹)」の転。たけの低い竹。
 72 ひきむしってやり。
 73 ヘンベイと読み、「反閉(へんべい)」の転か。反閉は昔邪気を除くために陰陽師が行った呪い。
 74 「あら」は詠嘆。以下牛の答えを、米・豆と聞きとった。
 75 「新開」(新たに開墾した土地)で、ここは自分だけ承知しておく意か。シンガイと発音したかもしれない。
 76 たいそう喜び。
 77 キハナヅル。木・藤などの環で、牛の鼻に穴をあけて通すもの。
 78 以下牛の誉めことば。
 79 足の立ち具合。
 80 尾は法華経八巻をひらいて垂らしたようである。
 81 太鼓の長くくぼんだ所。
 82 びつたりと。
 83 十把をひとまとまりとしたもの。
 84 輜重の車。
 85 「千丈」は非常に長い意。よくのびた稲を蒞り取る意か。
 86 足で占ったところでは、の意か。
 87 出来るに違いない。
 88 着せように。
 89 三世(曾孫)まで運が開く豆。水煮して大きくした大豆をいう。

- 90 原本に付した朱の○をそのまま記す(以下同)。
 91 山林伐採等の危険な仕事をする人。
 92 然るべき所に据え。
 93 くるるや蝶番で両側に開く戸。
 94 炉ぶち。
 95 未詳。
 96 未詳。
 97 「斎殿」(神をまつる建物)の転か。
 98 敷居と鴨居の溝にはめ、左右にあけたてする、引き戸。
 99 「木舞」(垂木の上に、横に渡した細長い材)で、「戸」は不要か。
 100 スキガラ。鋤の柄。
 101 婦人の意。
 102 尾の両脇にある銀杏の葉の形をした羽。
 103 未詳。
 104 北西。